

教えて♪ もくじい。シリーズ⑨

徳川家康とゆかりの文化財

「人の一生は重荷を負うて遠き道を往くがごとし。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。ここに望みおこらば困窮したるときをおもい出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思え、勝つことばかりを知りて負けることを知らざれば害その身に至る。己を責めて人をせむるな。及ばざるは過ぎたるよりまされり」



徳川家康公銅像(静岡市駿府城公園)

・・慶長8年(1603)、徳川家康が征夷大將軍に任ぜられたときに書いたとされる言葉です。苦難に満ちた少年時代、青年時代を過ごし、織田信長や豊臣秀吉の天下統一の事業に協力し、晩年には戦国時代を終わらせ、「太平の世」を築いた家康の人柄を良く表しています。今回はそんな家康の生涯や事績の中で身延町内に残されている文化財や、側室お万の方のゆかりの文化財を紹介します。

★徳川家康の生涯における主な出来事

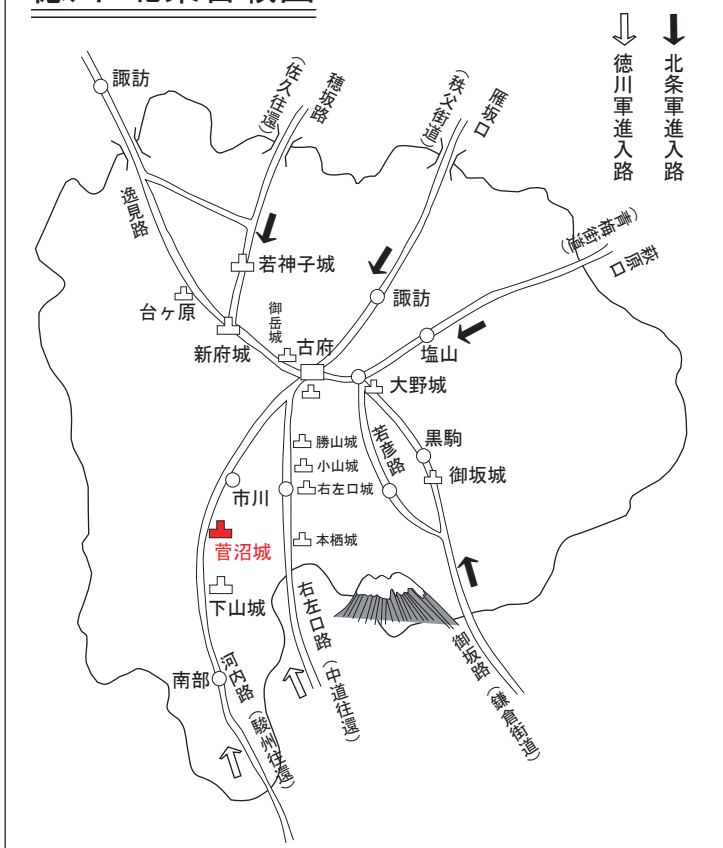
年次	西暦	年齢	出来事
天文11年	1542	1	三河国岡崎城で城主松平広忠の長男として生まれる。前年、穴山信友の長男として信君(梅雪)が誕生。
天文18年	1549	8	父が暗殺される。今川義元の人質になる。
弘治元年	1555	14	義元の下で元服し、松平次郎三郎元信と名乗る。
弘治3年	1557	16	今川氏の重臣 関口氏純の娘・築山殿をめとる。
永禄3年	1560	19	桶狭間の戦いに今川方の将として参陣。
永禄4年	1561	20	今川義元の討死を契機に今川氏から独立。西三河を平定。第4次川中島の戦い。
永禄6年	1563	22	信長の娘・徳姫と嫡男・信康が婚約。義元から与えられた「元」の字を返上し、家康を名乗る。
永禄9年	1566	25	松平から徳川に改姓。
永禄11年	1568	27	信玄と今川領の分割を約束し、遠江への侵攻を開始。信玄は駿河への侵攻を開始。
元亀元年	1570	29	姉川の戦いに参陣し、浅井・朝倉連合軍を破る。拠点を浜松城へ移す。
元亀3年	1572	31	三方ヶ原の戦いで武田信玄に大敗する。
天正元年	1573	32	武田信玄が死去。長篠城の攻略に成功。
天正3年	1575	34	信長軍と連合し、長篠の戦いで武田勝頼を破る。
天正10年	1582	41	信長と甲斐国へ進軍。武田勝頼が自害。本能寺の変で信長が自害。京へ同行していた梅雪は宇治田原で郷民一揆の襲撃に遭い死去。家康は伊賀越えて三河国に戻る。天正壬午の乱がおこる。
天正14年	1586	45	秀吉の妹・朝日姫と結婚。拠点を駿府城へ移す。
天正18年	1590	49	小田原攻めの先鋒を務める。秀吉から関東移封を命じられ、江戸城を拠点する。
文禄元年	1592	51	朝鮮出兵に参陣。家康は渡海せず備前名古屋に布陣。
慶長3年	1598	57	秀吉が死去。朝鮮出兵の諸将を引き揚げさせる。
慶長4年	1599	58	秀頼の後見となり、大阪城に入る。
慶長5年	1600	59	関ヶ原の戦いで、石田三成率いる西軍を破る。
慶長8年	1603	62	征夷大將軍となり、江戸幕府を開く。
慶長10年	1605	64	將軍職を秀忠に譲り、大御所となる。
慶長19年	1614	73	大阪冬の陣。
元和元年	1615	74	大阪夏の陣。秀頼と淀殿が自害し、豊臣家が滅亡。
元和2年	1616	75	太政大臣に任ぜられる。病により死去。

※年齢は数え年。赤字は武田信玄や穴山梅雪に関する出来事。

このミニブックは「身延町まち・ひと・しごと創生総合戦略」の中で作成したものです。

● 天正壬午の乱

徳川・北条合戦図



天正10年(1582)の2月から3月にかけて織田信長は甲州征伐を行い、天目山(甲州市大和町)で武田勝頼を滅ぼしました。同年6月2日、本能寺において信長が死亡すると、織田氏の支配体制が固まっていなかった旧武田領国(甲斐・信濃・上野西部)は混乱し、その領有を巡って、相模の北条氏政・氏直親子、駿河の徳川家康、越後の上杉景勝が争い、武田氏の傘下に入っていた真田氏や木曾氏などの動きが絡んで騒乱が起きました。本騒乱はこの年の干支が壬午であったため、天正壬午の乱といわれています。

上野国に侵攻した北条氏は碓氷峠から信濃国へと進軍し、北信濃の川中島で上杉氏と対峙した後和睦して佐久方面より南下し、甲斐国の若神子城（北杜市須玉町）に布陣しました。一方、河内路や中道往還より進軍した家康も新府城（韮崎市）を本陣として北条氏と

対峙しました。七里岩^{しちりいわ}の台地の上で7月下旬から3ヶ月続いたこの対陣は上野国を北条氏が、甲斐国と信濃国を徳川氏が領有することで和睦、家康は三河・遠江・駿河^{みかわ}を加えて五ヶ国を領する大大名となりました。

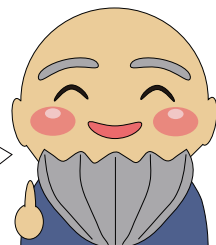
● 町指定史跡 菅沼城跡

富士川に突き出した台地の上、旧中富中学校の敷地にある菅沼城は、本能寺の変の直後、家康が伊賀越えいいがこの最中さなかに、武田旧臣の岡部正綱おかべまさつなに命じて築かせた城です。河内領主の穴山梅雪かろうちりょうしゆが山城国で落命したため、河内領の要衝ようしゅうを押え、北条氏の侵入に備えるために築いたものです。命を受けて下山に至った正綱は穴山衆あなやましゅうとともに築城にあたり、築城後徳川家臣の菅沼定政すがぬまさだまさが守備したことから菅沼城と呼ばれます。定政は、天正18年(1590)総州相馬そうしゅうそうまに移されるまで在城し、慶長7年けいちょう(1602)には廃城したと伝えられます。

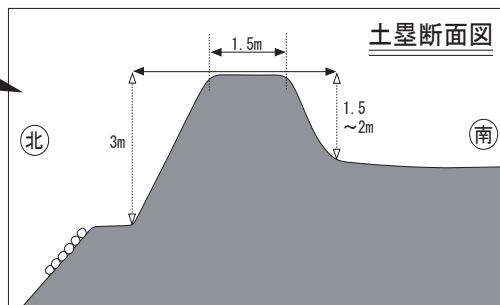
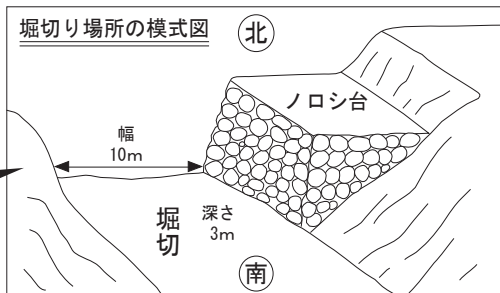
(次頁へ続く)



東を富士川、北を手打沢川、南を寺沢川、西を沢奥川に囲まれており、これを天然のお堀として巧みに利用した山城といえるのじゃ。周辺には城下町にちなんだ、町屋・鑄物師屋・雁帰（帰は城の宛字）・馬場などの地名も残っておるよ。



菅沼城跡は中学校建築の際に大部分を削平されてしまいましたが、工事に先立つ調査において土塁や堀切、ノロシ台跡、腰郭、石垣跡などが記録されています。南側の尾根には現在も平坦地が数段残っており、縄張図が掲載された資料もあります。



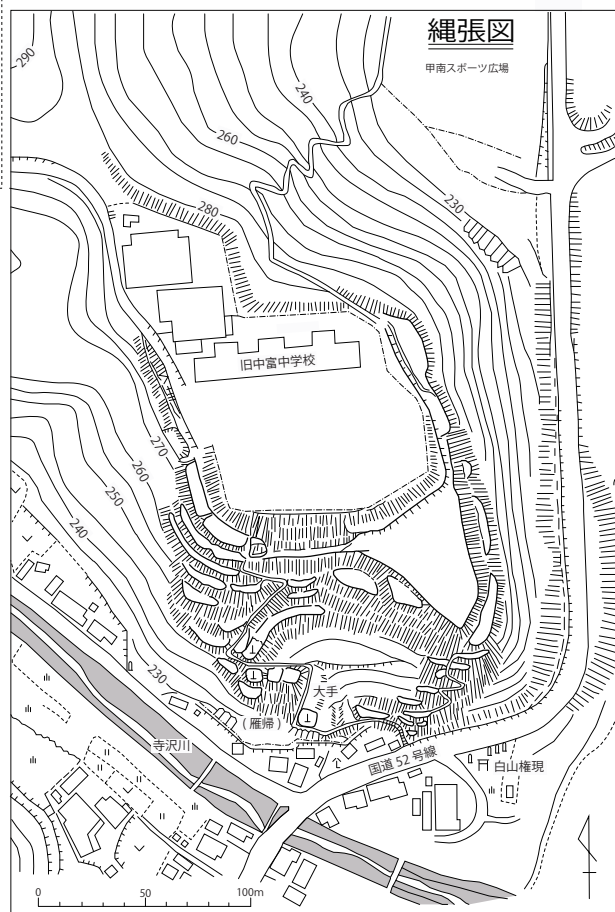
※ 平面図・堀切り場所・土塁断面図の模式図は中富町郷土資料研究会発行の『菅沼城とその歴史』を、右の縄張図は宮坂武男2006著『図解山城探訪第17集 山梨峡西・峡南・郡内地区資料』を基に作成。

土塁：敵や動物の侵入を防ぐためにつくられた土手状の高まり。盛土によりつくられたものが一般的であるが、地面を削り出して（切り残して）つくったものもある。

堀切：堀は地面を溝状に掘削したもので、堀切は尾根伝いに侵入する敵を防ぐため尾根筋を断ち切るように掘削したもの。

ノロシ台：狼煙台あるいは烽火台と書く。古くから煙や火

を使った通信方法で、侵略者の到来などを急ぎ伝達するために整備された。



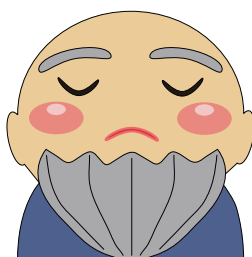
郭：曲輪とも書き、城の内外を土塁や堀、石垣などで区画した区域の名称。江戸時代には中心的な郭を本丸、二の丸、三の丸などの名前をつけた。腰郭は本丸から二の丸へ移る間の地形に高低差があるとき、本丸の腰に設けた段のある郭のこと。

縄張図：現状の地形から郭や土塁や堀などの防御施設の配置を読み取り、城の構造をわかりやすく示した図面のこと。

● 信玄の洗濯岩と白山権現

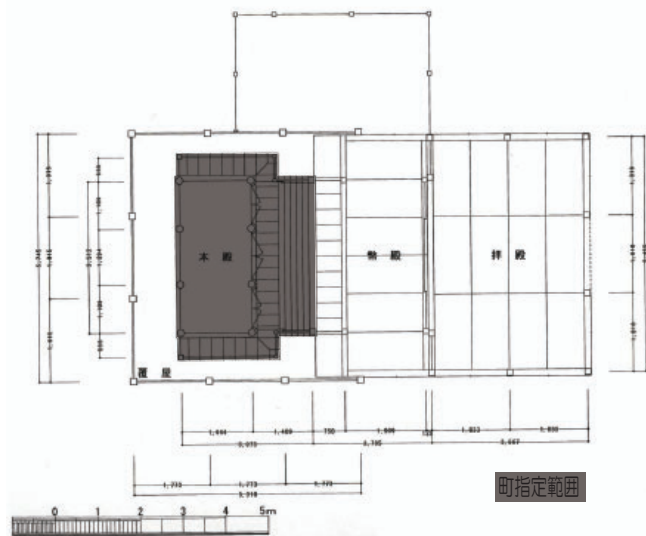
菅沼城より富士川を望む崖下に信玄の洗濯石と呼ばれる一枚岩がありました。戦国・武田氏の頃、菅沼城は烽火台であり、ここを警備する兵が崖道を下って洗濯した、また、信玄が身延山を攻めた帰路に戦塵を洗い落とした処と伝わります。崖道の登り口に白山権現が祀られています。信玄が歯痛をもよおし祈願したところ治癒したと伝わり、白山の由来は“歯苦山”だといわれています。以来、歯痛止めの神として、楊枝のすだれを編んで奉納すれば霊驗あらたかであったといいます。

信玄の洗濯岩は白山権現の崖下の川瀬に突き出ておったが、昭和41年(1966)の国道52号線拡幅工事の際、廃土で埋もれてしまったそうじゃ。

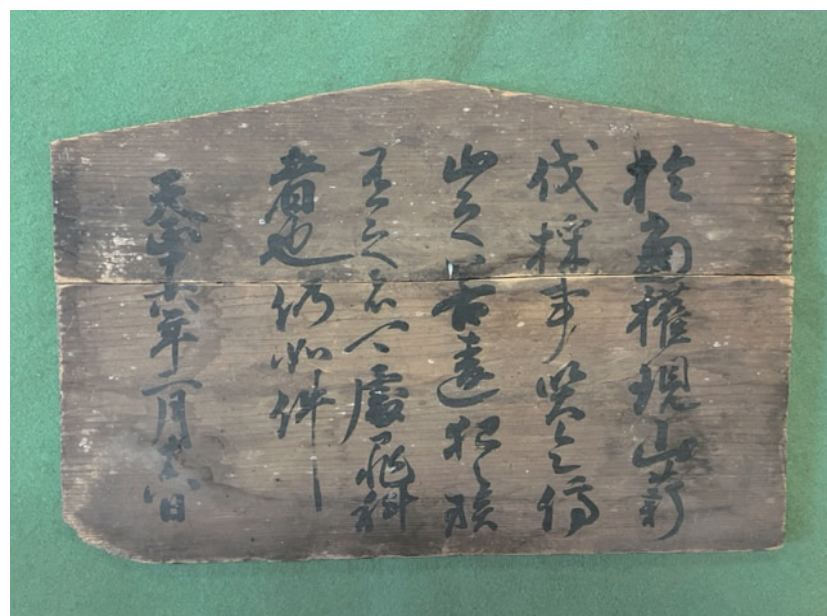


● 町指定文化財 熊野権現神社本殿と家康の制札

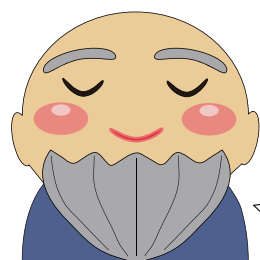
信玄の隠し湯といわれる下部温泉近傍の権現山に、湯権現または温泉宮と呼ばれる熊野権現神社があります。この神社の本殿は、乱石積の基壇上に自然石の礎石を置き、井桁に組んだ土台の上に建てられた三間社流れ造り、檜皮葺の社殿です。社記によれば、神社の創建は遠く承和3年（836）にさかのぼり、現在の社殿は天正2年（1574）の頃、穴山梅雪の再建と伝えられています。その後しばしば改修され、覆屋によって腐朽倒壊から保護されています。峡南地域における桃山時代初期の建築文化を物語る貴重な建造物の一つです。



左下の制札は天正16年（1588）に、下部温泉の熊野権現神社に家康より与えられたものと伝わります。神社の所有する山で勝手に薪を伐採する者があれば処罰すると書かれています。※禁令・法規などを箇条書きに記して、道端や寺社の境内などに立てた札。禁札。



於当権現山薪
伐採事堅令停
止之若違犯之族
有之者可処罪科
者也仍如件
天正十六年二月十六日



武田信玄公のかくし湯として有名な下部温泉。実は鎌倉時代、湯治に来たついでに身延山の日蓮聖人を訪ねた者を、聖人が追い返したという逸話も残っており。『甲斐国志』には「天正壬午ノ乱後神祖此ノ温泉ニ御入浴アリテ制札等下シ賜ハル」と記されており。神祖＝神君家康も古くから湯治場として名を馳せた下部温泉に入浴していたんじやのう。

● 町指定文化財 身延山上之山東照宮

東照宮は徳川家康を神格化した東照大権現を祭神として祀る神社です。家康が亡くなられた時、側室のお万の方が身延に詣でられ、法要を営まれた折に造立されました。木造平屋二間の一間半で、屋根は板葺きです。正面には精巧な彫刻が見られます。現在は覆屋によって保護されていますが、近年傷みが激しくなっています。久遠寺本堂から身延山奥の院への参道途中の41丁目、法明坊からすぐ登ったところにあります。



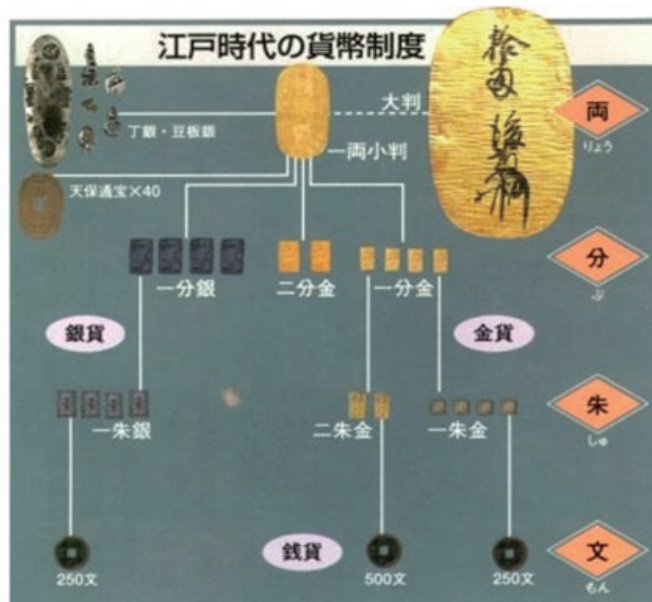
東照宮といえば栃木県の日光が有名じゃが、こちらは日本全国の総本社の存在で「日光の社寺」として世界遺産に登録されとるよ。

● 町指定文化財 甲州金と江戸幕府の金貨

甲州金は戦国時代に甲斐の領内で流通した地方貨幣で、その起源は信玄の碁石金とされ、日本で初めて制度化された金貨といわれます。制度の注目点は、従来質量で取引されていた金を両・分・朱・糸目といった単位の四進法による計数貨幣に変えたことです。金貨の表面には額面などの極印が押され、金の質量も統一が図られています。この四進法による貨幣制度は、後に家康によって江戸幕府に引き継がれました。

甲州金貨の製造期は大きく二つに分けられ、慶長元年頃～元禄8年（1596～1695）までに作られたものを古甲州金貨、宝永4年～享保17年（1707～1732）に作られたものを新甲州金貨と呼びます。何度か通用停止の危機に遭いながらも、貨幣制度発祥の地である甲斐国民衆の強い要望によって特例として通用を許されました。

甲州金と江戸幕府の金貨は甲斐黄金村・湯之奥金山博物館で詳しく紹介されとるよ。甲州金は国指定史跡「甲斐金山遺跡 中山金山」をはじめ、県内各地の金山で産出された金をもとに製造されたものじゃ。貨幣制度を支えた鉱山経営とその技術を解明する上でも貴重な歴史資料といえるのう。



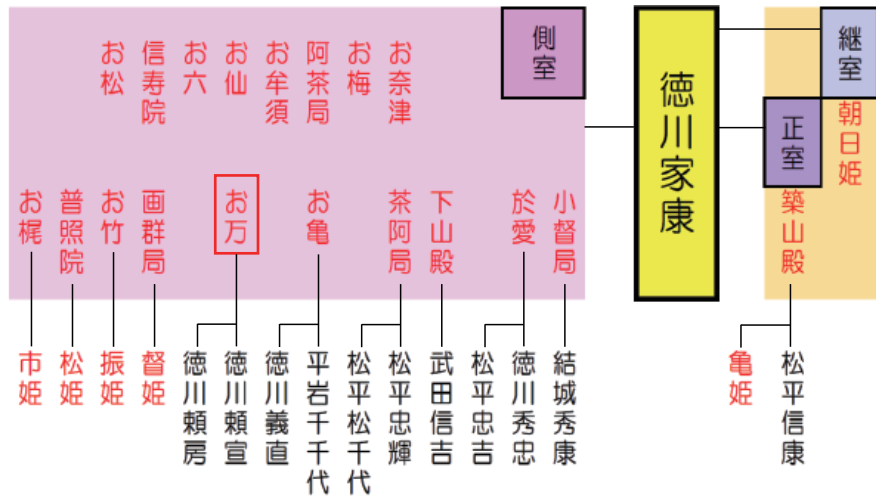
甲州金と江戸時代の貨幣制度(甲斐黄金村・湯之奥金山博物館ホームページより)

● 側室お万の方の生涯

家康には正室・側室含めて20人以上の妻がいたとされており、身延町には側室の一人、お万の方の足跡が多く残っています。

お万の方は、後の徳川御三家のうち二家、紀州藩祖徳川頼宣、水戸藩祖徳川頼房の生母です。家康は浄土宗を信仰していましたが、お万の方は義父の蔭山家が代々日蓮宗を信仰していた影響もあり、身延山第22世の日遠上人に皈依しました。家康が亡くなった後は髪を下ろして養珠院と号し、徳川家や各地の日蓮宗寺院の発展に尽力しました。

右の写真は七面山登山口の白糸の滝の傍らに建立されたお万の方の銅像です。七面山はもともと女人禁制の山でしたが、女人成仏を説く法華經の守護神、七面大明神への参詣を強く願ったお万の方は、白糸の滝で7日間身を清め、女性として初めて登頂を果たしました。

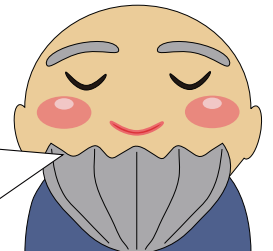


★お万の方の生涯における主な出来事

年次	西暦	年齢	出来事
天正5年	1577	1	勝浦城主正木頼忠の娘として生まれる。（※）
天正12年	1584	8	母親が蔭山氏広と再婚したことより蔭山一族となる。
文禄2年	1593	17	家康に江川英長（江川太郎左衛門）の養女として目見え、家康の側室となる。
慶長7年	1602	26	伏見城において家康十男となる頼宣を産む。
慶長8年	1603	27	伏見城において家康十一男となる頼房を産む。
慶長13年	1608	32	家康の命により駿府の安倍川原で磔にされようとした日遠上人の助命を嘆願。
元和2年	1616	40	家康の死後、養珠院妙昭日心大姉を法号名とする。
元和5年	1619	43	身延山で法華經一万部読誦の大法要を催し、満願の日に七面山に登詣。
承応2年	1653	77	死去

※河津城主蔭山氏広あるいは伊豆国冷川村の娘など諸説あり

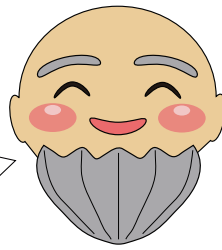
頼房の子には水戸黄門こと水戸光圀がおるし、頼宣の孫には8代将軍となった徳川吉宗がおる。まさに徳川家の礎を築いた女性ともいえるのう。ちなみに家康の側室にお万の方は二人おって、もう一人は家康次男結城秀康の生母小督局（長勝院 1548-1620）じゃよ。



● 国登録文化財 大鐘楼

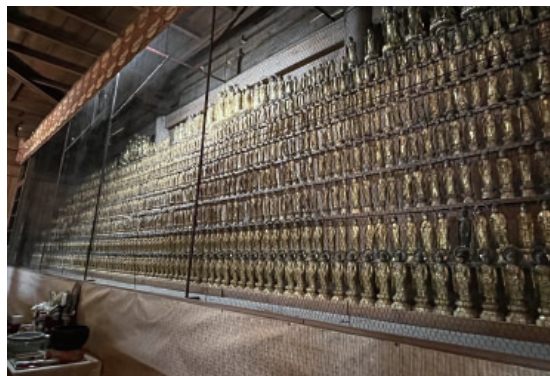
久遠寺大本堂前にある鐘楼で、明治15年（1882）の建立とされています。堂内の大鐘は寛永元年（1624）身延山第21世の日乾上人の代に鑄造されたことが刻銘でわかります。元は修行僧の道順が梵鐘寄進を發願し、諸国を行脚して浄財を募りましたが、志半ばで亡くなり、それを聞いたお万の方が憐れみ、自ら浄資を寄進し、道順の誓願を成就させるため建立されたものです。

外径156cmのとても大きな鐘が吊られておるよ。朝夕の鐘は一日も欠くことなく続けられておる。右の写真は鐘がつかれる寸前のものじゃ。

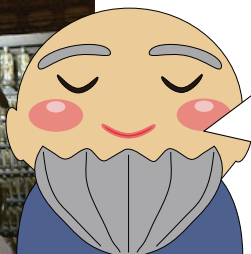


● 町指定文化財 丈六堂と釈迦像

身延山上の山地域錦ヶ森の丈六堂は、寛永20年（1643）身延山第26世日暹上人の代に、菩提梯を登ったところの二天門の横にあったものを、寛文4年（1664）第28世日眞上人の代に現在地に移したものです。堂内に一丈六尺の釈迦像をお祀りしていることから丈六堂と呼ばれています。この釈迦像と後方に祀られている千体仏は、寛永年間（1624～43）にお万の方等が寄進したものです。寄せ木造、漆箔の釈迦像は京都鳴滝三宝寺中正院日護上人作と伝わります。



お釈迦様の身長は一丈六尺（約4.85m）あったとされておる。丈六の長さは時代によって異なるんじゃが、仏像の大きさの基準とされ、その数倍や数分の一のサイズに造られたんじゃ。座像の場合は半分の八尺を基準とされておるよ。また、丈六よりも大きいものを大仏というんじゃ。



● 国指定重要文化財 本遠寺本堂・鐘楼堂

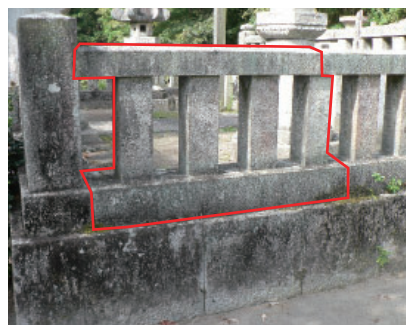
本遠寺は、慶長14年（1609）に身延山久遠寺を隠退した心性院日遠上人が、お万の方の帰依を受けて創建したといわれる日蓮宗のお寺で、実子徳川頼宣の寄進により諸堂が造立され寺観が整えられました。当時は身延山の末寺に属さず、頼宣から「本寺紛れ無きの由」の判物をもらうなど高い寺格を有していましたが、慶応3年（1867）の火災により伽藍の多くを失いました。本堂は、この火災を免れたもので日蓮宗の本格的な大規模本堂です。慶安3年（1650）の建立と考えられ、当初の形態をよく伝えています。

平成14年から平成20年にかけて解体修理を行い、屋根は当初の檜皮葺に復元されました。鐘楼堂は袴腰を付けず、柱を内転びとして一階を開放する珍しい形式の楼造鐘楼です。



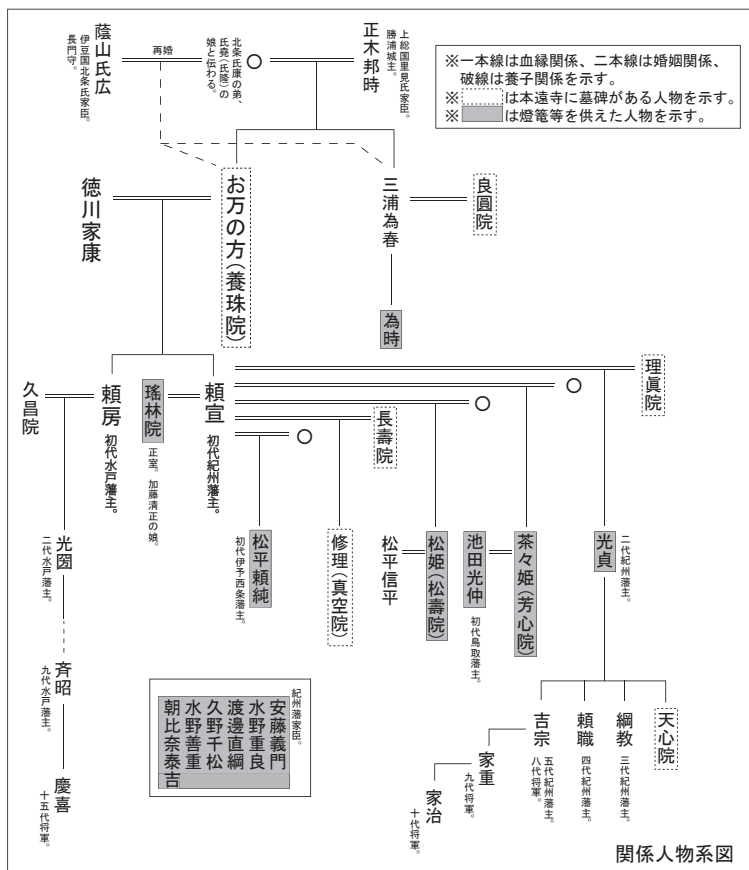
● 県指定史跡 徳川家康側室養珠院墓所

お万の方は承応2年（1653）、江戸の紀州藩邸で亡くなりました。頼宣は、お万の方の遺言により、本遠寺に壮麗で雄大な宝篋印塔を建立しました。墓石の宝篋印塔は関西形式で、正面の石門と周囲の玉垣の細工は県内では類例がなく、紀州藩が派遣した石工の手によるものと推定されています。当時最上級の技術や石材により造り出された墓所であり、近世大名墓の墓制を知る上で貴重な史跡といえます。



※赤線で囲まれた部材が一枚岩をくりぬいて組んだ玉垣

※墓所には頼宣の子（お万の方の孫）や紀州藩の家臣が供えた燈籠などもあります。



玉垣の部材は一枚岩をくりぬいてつくられておるよ。石材の御影石（花崗岩）は現在の笛吹市一宮町の京戸山から切り出して運んだと伝わっておるんじゃ。

